

小さな命"犬や猫、



いま、私たちに
出来ること!!

震

えながら、サクラ公園のダンボール箱の中で鳴いていた子犬……。ガリガリに痩せているのに、人なつつくく尾を振っていた足の不自由な犬……。可愛い子猫を連れていた野良猫……。

捨てられたのか、道に迷ったのか、飼い主のいない犬や猫たちは、食べる物もなく人の助けを待つかありません。

新光風台のなかには、こうした犬や猫の姿に心を痛め、その飼い主になったり、まだ飼い主探しに奔走してきた人も少なくありません。

飼

でも、どんなに飼ってやりたくても限られた敷地内では、その数に限りがあります。とくに最近、すでに動物を飼っている家庭が多く、また、その鳴き声やフンに対する苦情から『飼えば隣近所に

迷

惑をかけるのでは』といった気遣いもあって、なかなか飼い手が見つからないのが現状です。

この10月も自治会館前で一匹の子猫が鳴いていましたが約70名の役員はじめ、広い範囲にわたって声を掛けていったにもかかわらず、どこからも声が掛りませんでした。

奪

私たち人間は自分たちの生活環境のために多くの自然を失ってきました。その責任は絶滅の危機にある動植物だけでなく、もっとも身近な猫や犬に対しても同じ事が言えます。

しかし、その保護政策は皆無に等しく、たとえ保健所に引き取られても、檻のなかで衰弱死、餓死、圧死するか、人の手によって殺されるか……そんな悲惨な末路しかなく、生きて出られる可能性はほとんどありません。

殺

驚いたことに大阪府では、犬だけでも年間に約十萬匹が殺されています。その約7割が人に飼われることなく、ただ飢え、殺されるためだけに生まれてきた子犬たちであり、また3万匹の成犬のなかには捜しに来た飼い主と

出合えないまま殺されていく迷子ペットも数多くいます。

一匹の犬は6年間で6万7千匹の子孫を増やします。

『誰かが、飼ってくれるだろう』と無責任に捨てたり、

避

妊手術をしないで放置すること、こうした不幸な犬や猫たちを際限なく、この世に送り出しているのです。

その解決方法が莫大な財源を使って殺していく……

しかないのなら、私たちは犬や猫が生きる場所を奪っただけでなく、その命まで間接的に奪っている、と言っても過言ではないでしょう。

こうしたなか、その命を守るために闘っている人もいます。その一人が能勢町在住の英国人で、大学講師のエリザベス・オリバーさんです。

常時、私邸を開放して、約80匹の犬や猫のためにエサを作り、予防注射、避妊手術、病気の治療、里親さがし……に取り組んでいます。その活動は、精神的に肉体的に経済的にも、決して楽なことではありません。なかには、この近郊で飼われ迷ってしまったペットもいるなど、もし飼い主が首輪に連絡先を記入していれば……もっと事

経

犬や猫の飼い手を求めているオリバーさん。

連絡先 ☎37-0712

態は変わるはず。これ以上、不幸な動物を増やさないためには、飼い主の責任はむろんのこと、社会的、地域的な協力が必要。です。

いま、私たちに出来ることは身近な犬や猫を大事にしたり、あるいはオリバーさんの負担を軽くするには、どうしたらいいか、考えることであって、少なくとも犬や猫を飼っている人と、飼っていない人が対立していても、問題は一つ解決しません。たとえ個人の力は小さくても、個人の力を集れば大きな力になります。犬や猫が暮らしやすい街は、命の大切さを知っている街であり、それは自分たちにとっても暮らしやすい街と言えるのではないでしょう。

命

